

世之助の話

芥川龍之介

青空文庫

上

友だち 処でね、一つ承りたい事があるんだが。

世之助 よのすけ 何だい。馬鹿に改まつて。

友だち それがさ。 今日はふだんとちがつて、君が きんきん 近々に伊豆の何とか云ふ港から船を出して、によごしま 女護ヶ島へ渡らうと云ふ、その名残りの酒宴だらう。

世之助 さうさ。

友だち だから、こんな事を云ひ出すのは、何だか一座の興を殺ぐやうな気がして、たいふ 太夫の手前も、いささか 聊恐縮なんだがね。

世之助 そんならよせばいいぢやないか。

友だち 処が、よせないね。よせる位なら、始から云ひ出しはしない。

世之助 ぢや話すさ。

友だち それがさ、 さう中々簡単には行かない訳がある。

世之助 何故？

友だち 尋^きく方も、尋^きかれる方も、あんまり難^{ありがた}有^{いた}い事ぢやないからね。尤^{もつと}も君^{いよいよ}が愈^{いよいよ}いと云へば、私も度胸を据ゑて、承^{うけたま}る事にするが。

世之助 何だい、一体。

友だち まあさ、君は何だと思ふ。

世之助 ぢれつたい男だな。何だつて云へば。

友だち いやさう開^{ひら}き直^{ただ}されると、反^{かへ}つて云ひ出しにくいがね。つまり何さ。——この頃^{さいかく}西^{さい}鶴^{かく}が書いた本で見ると、君は七つの時から女を知つて……、

世之助 おい、おい、まさか意見をする気ぢやあるまいね。

友だち 大丈夫、叔父さんがまだ若^{わか}すぎる。——そこで、六十歳^{こんにち}の今日^{こんにち}まで、三千七百

四十二人の女に戯^{あそ}れ……

世之助 こいつはちと手^てきびしいな。

友だち まあさ、三千七百四十二人の女に戯^{あそ}れ、七百二十五人の少^{せうじん}人^{もてあそ}を弄^{もてあそ}んだと云ふ事

だが、あれは君、ほんたうかい。

世之助 ほんたうだよ。ほんたうだが、精^{せいぜい}々^{てやはら}お手^て柔^{やはら}かに願^{ねが}ひたいな。

友だち それが、どうも私には少^まし真^まにうけられないんだね。いくら何だつて君、三千七

百四十二人は多すぎるよ。

世之助 成程ね。

友だち いくら君を尊敬した上でもだよ。

世之助 ぢや勝手に割引して置くさ。——太夫たいふが笑つてゐるぜ。

友だち いくら太夫が笑つてゐても、この儘ままにはすまされない。白状すればよし、さもなければ、——

世之助 盛りつぶすか。そいつは御免を蒙かうむらう。何もそんなにむづかしい事ぢやない。唯、私の算盤そろばんが、君のと少しちがつてゐるだけなんだ。

友だち ははあ、すると一桁ひとけた狂つたと云ふ次第かい。

世之助 いいえ。

友だち ぢや——おい、どつちがちれつたい男だつけ。

世之助 だが君も亦、つまらない事を気にしたもんだ。

友だち 気にするつて訳ぢやないが、私だつて男だらうぢやないか。何割引くか判然しない中は首を切られても、引きさがない。

世之助 困つた男だな。それならお名残りに一つ、私の算盤のとり方を話さうか。——お

い、加賀節はしばらく見合せだ。その祐善すけよしの絵のある扇をこつちへよこしてくれ。それから、誰か蠟燭ろうそくの心しんを切つて貰ひたいな。

友だち いやに大袈裟おほげさだぜ——かう静になつて見ると、何だか桜もさむいやうだ。

世之助 ぢや、始めるがね。勿論唯一例を話すだけなんだから、どうかそのつもりに願ひたい。

中

もう彼かれ是これ三十年ばかり昔の事だ。私が始めて、江戸へ下つた時に、たしか吉原のかへりだつたと思ふが、太鼓を二人ばかりつれて、角田川すみだがはの渡しを渡つた事がある。どこの渡しだつたか、それも今では覚えてゐない。どこへ行くつもりだつたか、それももう忘れてしまつた。が、その時の容子ようすだけは、かう云ふ中うちにも、臃おぼろげながら眼の前へ浮んで来る。
……

何でも花曇りの午ひるすぎで、川すぢ一帯、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だつた。水も生ぬるさうに光つてゐれば、向う河岸がしの家並やなみも、うつらうつら夢を見てゐるやう

に思はれる。後うしろをふり返ると、土手の松にまじつて、半開の桜が、べつたり泥どろ絵具えぐをなすつてゐた。その又やけに白いのが、何時いつになく重くるしい。その上少し時候はづれの暖さで、体さへ動かせば、すぐじつとりと汗がにじむ。勿論さう云ふ陽気だから、水の上にも、吐息といき程の風さへない。

乗合は三人で、一人は国姓爺こくせんやの人形芝居からぬけ出して来たやうな、耳の垢あか取り、一人は廿七八の、眉をおとした町家ちやうかの女房、もう一人はその伴ともらしい、涙はなをたらした丁稚でつちだつた。それが互に膝をつき合せて凡およそまん中どころに蹲うづくまつたが、何分舟が小さいので、窮おびただな事夥しい。そこへ又人が多すぎたせるか、ともすれば、舷ふなべりが水にひたりさうになる。が、船頭は一向平気なもので、無愛想な老爺おやぢの、竹の子笠をかぶつたのが、器用に右左へ棹さを使ふ。おまけにその棹しづくの雫が、時々乗合の袖にかかるが、船頭はこれにも頓着する容さ子が無い。——いや、平気なのは、まだ外にもある。それは例の甘輝かんあき字は耳の垢とりで、怪しげな唐装束からしやうぞくに鳥の羽毛はねのついた帽子をかぶりながら、言上げことあの幟のぼりを肩に、獅子ヶ城やぐらの櫓のぼへ上つたと云ふ形で、舳みよしの先へ陣どつたのが、船の出た時から、つけ髻ひげをしごいては、しきりに鼻唄はなうたをうたつてゐる。眉のうすい、うけ唇くちの、高慢な顔を、仔細らしくしゃくりながら、「さん谷や土手下にぬしのない子がすててんある」と、そそののだから、これ

には私ばかりか、太鼓たちも聊たじろいだらしい。

「唐人の『すててん節』は、はじめてでげす。」

一人が、扇をぱちつかせながら、情ない声を出して、かう云つた。すると、それが聞えたのだらう。私と向ひあつてゐた女房が、ちよいと耳の垢とりの方を見ると、すぐその眼を私にかへして、鉄漿かねをつけた歯を見せながら、愛想よく微笑した。黒い、つやつやした歯が、ちらりと唇を洩れたかと思ふと、右の頬にあさく齧あぐはが出来る。唇には紅がぬつてあるらしい。——それを見ると、私は妙にへどもどして、悪い事でも見つけられた時のやうな、一種の羞恥しうちに襲はれてしまった。

が、かう云つたばかりでは、唐突すぎる。曰いはくは、この舟へ乗つたそもそもからあつたのだから。——と云ふのは、最初、土手を下りて、あぶなつかしい杭くひを力に、やつと舟へ乗つたと思ふと、足のふみどころが悪かつたので、舳ふなべりが水をあほると同時に、大きく一つぐらりとゆれる。その拍子に、伽羅きやらの油のほひが、ぶんと私の鼻を打つた。舟の中に、女がある——その位な事は、土手の上から川を見下した時に、知つてゐた。が、唯女があると云ふだけで、（廓くわくのかへりではあるし）それが格別痛切にさう思つてゐた訳でも何でもない。だから、伽羅の油のほひを嗅かぐと、私は、まづ意外な感じがした。さうしてそ

の意外の感じの後には、すぐに一種の刺戟を感じた。

唯にほひだからと云つても、決して馬鹿にしたものではない。少くとも私にとつては、大抵な事が妙に嗅覚と關係を持つてゐる。早い話が子供の時の心もちだ。手習に行くときよくいたづらつ子にいちめられる。それも、師匠に云ひつけければ、後の祟が恐ろしい。そこで、涙をのみこんで、一生懸命に又、草紙をよごしに行く。さう云ふ時のさびしい、たよりのない心もちは、成人になるにつれて、忘れてしまふ。或は思ひ出さうとしても、容易に思ひ出し悪い。それが腐つた灰墨のにほひを嗅ぐと、何時でも私には、そんな心もちがかへつて来る。さうして、子供の時の喜びと悲しみとが、もう一度私を甘やかしてくれる。——が、これは余事だ。私は唯、伽羅の油のにほひが、急にこの女房の方へ、私の注意を持つて行つた事さへ話せばよい。

さて、気がついて、相手を見ると、黒羽二重の小袖に裾取の紅うらをやさしく出した、小肥りな女だつた。が、唐織寄縞の帯を前でむすんだ所と云ひ、投島田に平元結をかけて対のさし櫛をした所と云ひ、素人とは思はれない位な、なまめかしさだ。顔はあの西鶴の、「当世の顔はすこしまろく、色はうすはな桜にて」と云ふやつだが、「面の道具の四つ不足なく揃ひて」はちと覺束ない。白粉にかくれてはゐるが、雀斑も

少々ある。口もとや鼻つきも、稍^{やや}下品だつた。が、幸^{さい}生^{いは}際^{はえぎ}がいいので、さう云ふ難も、大して目に立たない。——私はまだ残つてゐた昨夜^{ゆうべ}の酔^よが、急にさめたやうな心もちがして、その女の側へ腰を下した。その下した時に又、曰くがある。

曰くといふのは、私の膝が、先方の膝にさはつたのだ。私は卵色縮^{ちりめん}緬^{めん}の小袖を着てゐる。下は多分肌着に、隠し緋^ひ無^む垢^くだつたらう。それでも、私には、向ふの膝がわかつた。着物を着た膝ではない。体の膝がわかつたのだ。柔^{やはらか}な円^まみの上に、かすかなくぼみが、うすく膚^{あぶら}膩^にをためてゐる——その膝がわかつたのだ。

私は、膝と膝とを合せたまま、太鼓を相手に氣のない冗談を云ひながら、何かを待設けるやうな心もちで、ぢつと身動きもしないでゐた。勿論その間も、伽羅の油のほひと、京おしろいのほひとは、絶えず私の鼻を襲つて来る。そこへ、少しした中には、今度は向ふの体温が、こちらの膝へ伝はつて来た。それを感じた時のむづ痒^{がゆ}いやうな一種^{せんり}の戦^{せんり}慄^{おそ}は、到底形容する語^{ことば}がない。私は唯、それを私自身の動作に翻譯する事が出来るだけだ。——私は、眼を軽くつぶりながら、鼻の穴を大きくして、深くゆるやかな呼吸をした。それで君に、すべてを察して貰ふより外はない。

が、さう云ふ感覺的な心もちは、すぐにもう少し智的な欲望をよび起した。先方も私と

同じ心もちであるだらうか。同じ感覚的な快さを感じてゐるだらうか。——それはかう云ふ疑問だつた。そこで私は、顔をあげて、わざと、平気を装ひながら、ぢつと向ふの顔を見た。が、そのつけやきばの平気は、すぐに裏切られるやうな運命を持つてゐた。何故かと云ふと、相手の女房は、その稍汗ばんだ、顔の筋肉のゆるみ方と、吸ふものをさがしてゐるやうな、かすかな唇のふるへ方とで、私の疑問を明かに肯定してくれたから、さうして、その上に、私自身の心もちを知つてゐて、その知つてゐる事に、或満足を感じてゐる事さへも、わからせてくれたから——私は聊か恐縮しながら、てれがくしに太鼓の方をふりむいた。

「唐人の『すててん節』は始めてだす。^{はじめ}」

太鼓がかう云つたのは、丁度その時だつた。耳の垢とりの鼻唄を笑つた女房と、私が思はず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然でない。が、その羞恥は、当時、女房に対して感じた羞恥のやうな気がしてゐたが、後になつて考へて見ると、実は女房以外の人間に対して感じた羞恥だつた。いや、さう云つては、まだ語弊がある。人間がさう云ふ場合、一切の他人（この場合なら、女房も入れて）に対して感じる羞恥だつた。これは当時の私が、さう云ふ羞恥を感じながら、女房に対しては、次第により大胆になれたのも、

わかりはしないだらうか。

私は全身のあらゆる感覚を出来る丈鋭くしながら、香^{かう}を品^{ひん}する人のやうな態度で、相手の女房を「鑑賞した。」これは私が殆^{ほとん}すべての女に對してする事だから、大方君にも以前に話した事があるだらう。——私は稍汗ばんだ女の顔の皮膚と、その皮膚の放散するにほひとを味^{あぢ}つた。それから、感覚と感情との微妙な交錯^{かうさく}に反應する、みづみづしい眼の使ひを味つた。それから、血色のいい頬の上で、かすかに動いてゐる睫毛^{まつげ}の影を味つた。それから、膝へのせた手の、うるほひのある、しなやかな、指のくみ方を味つた。それから、膝と腰とにわたる、むつちりした、弾力のある、ゆたかな肉づきを味つた。それから——かう話して行けば、際限がないから、やめにするが、兎に角私はその女房の体を、あらゆる点から味つた。敢て、あらゆる点と云つても、差支へはない。私は感官の力の足りない所を、想像の働きの補つた。或は、その上に又、推理の裏打さへも施した。私の視覚、聴覚、嗅覚、触覚、温覚、圧覚、——どれ一つとして、この女房が満足させてくれなかつたものはない。いや実に、それ以上のものにさへ満足を与へてくれた。……………

「忘れものをおしでないよ。」

それから、かう云ふ声を聞いた。さうしてそれと同時に、今まで見えなかった、女の細い喉が見えた。その蓮葉はすはな、鼻にかかった声と、白粉の少しむらになった、肉のうすい喉とが、私に幾分の刺戟を与へるのは云ふまでもない。が、それよりも寧むしろ私を動かしたのは、丁稚でつちの方へふりむいた時の動作が、私の膝へ伝へてくれる、相手の膝の動き方であつた。私は前に、向ふの膝がわかつたと云つた。が、今はそれだけではない。向ふの膝のすべてが——それをつくつてゐる筋肉と関節とが、九年母くねんぼの実と核たねとを舌の先にさぐるやうに、一つ一つ私には感じられた。黒羽二重の小袖は、私にとつてないにひとしかつたと云つても、過言ではない。これは、すぐ次に起つた最後の曰いはくを知つたなら、君も認めない訳には行かないだらう。

やがて、舟は棧橋さんばしについた。舳みよしがとんと杭くひにあたると、耳の垢とりは、一番に向ふへとび上る。その途端に私は、わざと舟のあほりを食つたやうに装つて、（乗る時にも、さうだつたので、これは至極自然に見えるだらうと思つてゐた。）よろけながら、手を舳ふなべりの上にある女房の手にかけた。さうして、太鼓に腰を支へられながら「これは失礼」と声をかけた。君はその時、私がどんな心もちだつたと思ふ？ 私は、この接触から来る可かなり也強

い刺戟を予想してゐた。恐らく私の今までの経験は、最後の仕上げを受ける事だらうとさへも思つてゐた。が、この予想は見事に、外れてしまつたのではないか。私は勿論、滑な、寧つめたい皮膚の手ざはりと、柔かい、しかも力のある筋肉の抵抗とを感じた。しかし、それらは、結局今までの経験の反復にすぎない。同じ刺戟は、回数と共に力を減じて来る。ましてこの時は予想が大きい。私は索漠とした心もちで、静に私の手をはなさなければならなかつた。もし私の今までの経験が、完全にこの女房の体を鑑賞したのでなかつたなら、かう云ふ失望はどうして、説明する事が出来るだらう。私はこの女を、感覺的に知りつくした。——どうしても、かう考へるより外はない。

これは、またかう云ふ事から考へて見ても、わかるだらう。それは私が昨日なじんだ吉原の太夫と、今の女房とを、私の心もちの上でくらべて見るとする。成程一人は一夜中一しよに語りあかした。一人は僅の時間だけ、一つ舟に乗つてゐたのに過ぎない。が、その差別は、膚下一寸でなくなつてしまふ。どちらが私に、より多く満足を与へたか、それは殆どわからない。従つて、私が持つて居る愛惜も（もしさう云ふものがあるとすれば）全く同じやうなものである。私は右の耳に江戸清掻きの音を聞き、左の耳に角田川の水の音を聞いてゐるやうな心もちがした。さうしてそれが両方とも、同じ調子を出してゐる

やうな心もちがした。

これは、私には兎も角も発見だつた。が、総じて、発見位、人間をさみしくするものはない。私は花曇りの下を、丁稚を伴ともにつれて、その眉のあとの青い女房が、「ぬきあし中なかびねりのあるきかた」で、耳の垢うしろとりの後から、棧橋を渡るのを見た時には、何とも云へずさびしかつた。勿論惚れた訳でも何でもない。唯向うでも大体私と同じやうな心もちでゐたと云ふ事は、私のさはつた手を動かさずにゐたのでも、わかるだらう。……

なに吉原の太夫？ 太夫はまるでそれと反対な、小さい、人形のやうな、女だつた。

下

世之助 まづざつと、こんなものだつた。そこで、それ以来、その女のやうなものを関係した中へ勘定したから、合せて男なん女によ四千四百六十七人に戯れた事になると云ふ次第さ。

友だち 成程、さう聞けば尤もらしい。だが……

世之助 だが、何だい。

友だち だが、物騒ぶつさうな話ぢやないか。さうなると、女房や娘はうつかり外へも出されな

い訳だからね。

世之助 物騒でも、それがほんたうなのだから、仕方がない。

友だち して見ると、今にお上から、男女同席御法度の御布令おふれでも出かねなからう。

世之助 この頃のやうぢや、その中に出るかも知れないね。が、出る時分には、私はもう女護によごケ島しまへ行つてゐる。

友だち 羨うらやませるぜ。

世之助 なに女護ケ島へ行つたつて、ここにゐたつて、大してかはりはしない。

友だち 今の算盤そろばんのとり方にすれば、さうだらう。

世之助 どうせ何でも泡沫夢幻はうまつむげんだからね。さあ改めて、加賀節でも承らう。

(大正六年四月)

青空文庫情報

底本：「現代日本文学大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

初出：「新小説」

1918（大正7）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：j.utyama

校正：柳沢成雄

1998年10月11日公開

2012年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

世之助の話

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>